２０２０年度　入門講座　　　　　　　　　　　　　　　　 2021/1/24

**第二十九課　教会の発展**

**―　人間の弱さの中にある神の力　－**

**教会の意味**

　　教会とは、ギリシャ語で「エクレシア」と言い、「呼び集められた人」という意味である。すなわち、キリストによって兄弟姉妹とされ、イエスの教えに従って生きる人々の集いを教会と呼ぶ。キリストの弟子たちを中心に生まれた教会はペトロを頭として、徐々に信者を増やし、使徒パウロによって地中海世界にキリスト教が伝えられていった。教会の頭ペトロの使命は、その後継者ローマ法王と呼ばれる教皇に受け継がれ、現在の教皇は２６６代目フランシスコである。

**旅する教会**

人間の一生にたとえると、人は生涯をかけて人間になっていく。同じように、教会も自己実現（完成）に向かって旅する教会である。神の教会は、それを形成している人々の手に委ねられたとき、人間的な失敗や罪を繰り返し、今日まで発展してきた。教会は常に罪人の教会である。その罪の姿の中に教会の本質を知ることができる。

**Ⅰ古代教会**ギリシャ（ヘレニズム）・ローマ文化の栄えた時代で、500年ごろまで。

1. ヨハネの福音書序文にみられる古代教会の姿　（ヨハネ1:1-8）

ヨハネ9章の目を癒された男の話にあるように、信徒たちは、イエスに従っていこうとしてユダヤ人の村から追放され、村八分にされた。それでも彼らは、一致団結して祈った。初期の信徒たちは、その厳しさの中で聖霊に導かれて強められた一つの共同体、すなわち「教会」として集まり、共に祈り神を賛美した。「パンを裂き」、イエスが最後の晩餐で行ったことの記念を行った。これが現在のミサの原型である。

1. 迫害時代

長い歴史のあるユダヤ教から見れば、当時のキリスト教は新しい宗教であって、ユダヤ人たちになかなか受け入れられなかった。

さらに、ローマ帝国の指導者たちからは、民衆をあおって帝国に反乱を起こす危険な集団と見られていた。

こうしたキリスト教徒たちへの見方が迫害として現れたのである。

教会は使徒の時代からローマ帝国の支配下で、３００年もの迫害時代を通り、多くの殉教者を出した。しかし、殉教者の血は信仰の種となり、迫害にもかかわらず信徒は増え続けたのである。

初期の時代の迫害では、ネロ(1世紀半)やドミティアヌス(1世紀末)によるものが知られている。ローマ帝国内では古代ローマの神々を礼拝し、皇帝自身を崇拝することが求められ、それを認めないキリスト教徒は無神論者として捕えられ処刑された。(コロセウム、カタコンベ)

自分の命をかけて生きていた初期のキリスト信者の質の高さは、迫害と密接に関連している。信仰とは生をもってなすこと、自分の命をもって証するもの。殉教による証は高く評価された。

**Ⅱ　重大な転機**

1. 信仰の自由

３１３年、ローマ帝国のコンスタンチヌスが、母である聖女ヘレナの説得によって禁教令を解く。３９２年、テオドシウス帝によって国教とされる。

迫害がなくなっただけではなく、キリスト教はローマの公式宗教となった。

信者も増え、各地に教会が建立され、組織化される。

それ以降、教会には平和な時代が続き、次第に教会はローマを拠点にヨーロッパから北アフリカなどに広まっていった。社会制度も思想も文化もキリスト教を中心に発展する。

教会の変化　　同じ古代教会といってもキリスト教公認前後で、状況がすっかり変わる。

**純粋な信仰共同体**

**↓**

**皇帝が教会に対して権力を持つようになり、政治社会の構成要素としての教会と**

**なる。**

1. 修道生活はどのように始まったのか？

迫害終結後の教会の新しい状況が生んだのが修道生活であった。

＊コンスタンティヌス以降、教会は「この世」と同じ方向へ広がった。

(教会の秩序と国家・文化・法的秩序が同一化)

↓

＊教会が「この世」のものでないことを表明する生活形態として、キリストに徹底的に従う修道生活が注目されるようになる。

*「持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい。・・・・それからわたしに従いなさい。」ルカ18:22、（マタ19:30、マコ10:17-30）*

＊砂漠での隠遁生活；キリスト教において先駆けとなったのは、エジプトの砂漠で隠遁生活を送ったアントニオ（251-356）である。

この世俗の生活を離れて、祈りと節制に努める生き方は、古くユダヤ教にも見られる。

仏教やヒンズー教でも同様の生活が実践されている。

＊共住の始まり；アントニオと同時代、エジプト出身のパコミオスは単独での隠遁生活ではなく、同じ志を持つ者が共同生活を営む修道院を設立した。その後の修道生活の基礎となった。

＊修道生活の父ベネディクト；６世紀にイタリア出身のベネディクトが独自の修道院を創立し、そこで執筆されたベネディクトの『会則』はその後の修道院制度の土台となる規定となった。

モットー「祈り、働け」祈りによって日々の労働を神への奉仕として捧げ神を賛美する生活。

労働は奴隷の仕事であり、価値を持たないという当時の一般概念をくつがえした。

その後、中世になると多くの修道会が創立された。修道院は、文学・神学・音楽・美術などの分野で大きな業績を残し、西方キリスト教文化の発展に貢献した。

９世紀に神聖ローマ帝国が終わると、ヨーロッパは混乱し、教皇が人々の精神的支柱となったことから、教会に縦の構造が成立した。同時に、信仰は修道会によって支えられていく。この時代、教会は聖職者または修道者を中心に動いたが、１３世紀になると、積極的な信徒の活動が起こってくる。

**Ⅲ　もう一つの転機　―**教会の危機；暗黒時代（900年～1000年）

　１．教会の東西分裂　395年

　　＊古代世界において、ローマ帝国は、西はイベリア半島から東はパレスティナに至るまでの広大な地域を支配下に置いた。帝国の都ローマは西方ヨーロッパの文化や

経済などあらゆる分野の中心地として栄えた。4世紀初めにキリスト教を公認したコンスタンティヌス一世は、広大な地区を管轄する為、それまでビザンティオンと呼ばれていた町をコンスタンティノポリス(現在のイスタンブール)とし、東方に第二の都市をおいた。

＊4世紀末から始まった民族大移動により、ローマ帝国内は混乱に陥り、帝国は395年に東西に分裂した。

＊西ローマ帝国はゲルマン民族の侵入によって5世紀半ばに崩壊した。この崩壊した帝国内で民衆の精神的支柱になったのは教会であった。ローマ教皇の指導のもとで結束を強め、新しく台頭してきた民族フランク王国と結びつき、数世紀をかけて西方キリスト教世界が形成された。

＊一方東ローマ帝国は蛮族の侵入を逃れ、6世紀前半には、東方教会の総本山はギア・ソフィア大聖堂が建立された。しかし8世紀に入るとイスラム教の台頭により、アラブ民族の侵入が相次ぎ、さらにバルカン半島が北からのスラブ民族の侵入によって、西方世界との交流を阻まれ、孤立した。

　　＊東西教会の分裂(1054年)

　　　西方キリスト教会ではローマ教皇の権力が増大し、侵入したフランク族がキリスト教に改宗し、西方教会とゲルマン民族による国家との関係が強くなった。

この出来事が東ローマ帝国に不信を抱かせ、典礼と教義に関する問題に端を発して東西教会が分裂した。東方教会はオーソドックス・ギリシャ正教となった。

　　　　　　　　御茶ノ水のニコライ堂

＊以後900年両教会は分裂状態にあったが、20世紀半ばの第二バチカン公会議を経て、教皇パウロ二世と総主教アテナゴラス一世との間で、和解と一致の道を歩むことを共同宣言した。

２．十字軍の派遣

＊イスラム勢力の拡大；イスラム教は7世紀以降、瞬く間に勢力を増し、領土の拡大に乗り出した。8世紀初めには東ローマ帝国に迫り、さらにエジプト、北アフリカなどを支配下に置いた。そして北アフリカからイベリア半島に進出し、スペインのほぼ全土を支配するに至った。スペイン各地に歴史的価値のあるイスラム建築や美術が残されている。

　　＊１１世紀初、東ローマ帝国はイスラム教徒からエルサレムを奪還するため、ローマ教皇に援軍を要請した。この呼びかけを受けて西方諸国から集まった多国籍の人々によって結成され、近東諸国に派遣されたのが「十字軍」である。約200年間におよび7回にもおよんで派遣されたが、結果的に成功を収めたとは言えない。

エルサレム奪回という大義の背後に、地中海貿易の利権や戦利品を巡る内部争い、現世的欲望が渦巻き、略奪や殺戮によりキリスト教とイスラム教、西方と東方教会の関係悪化の一因となった。

**Ⅳ　中世から近世までの教会**　（封建制度の時代）

　古代から中世への移行は、教会の歴史が国家との関連の中で展開してきた。教会と国家との関連問題が中世の主軸をなす。以後十九世紀までは、教会が社会と密着、一体化した時代であった。全ヨーロッパがキリスト教化され、キリスト教文化というヨーロッパ独特の社会が築かれた。中世になると多くの修道会が創立された。修道院は、文学・神学・音楽・美術などの分野で大きな業績を残し、西方キリスト教文化の発展に貢献した。

一方、中世・ルネサンス時代を経て、ヨーロッパは自然科学の分野での目覚ましい発展を遂げ、人文主義による人間性の復興などによって新しい時代へ向かおうとしていた。西欧文化の担い手となったキリスト教も、この時代大きな転換期を迎える。

教会は、習慣・風俗・文化などの精神的な面だけでなく、強力な政治力支配権を持つようにな

る。司教や枢機卿は封建領主となり、領土や財産を持ち、支配権を持っていた。

12世紀、教皇イノチェンチオ3世　教皇権絶頂を極めキリスト教文化大きく開花。

ローマ教皇を頂点とする位階制度(ヒエラルキア)が確立し、聖職者中心の教会意識。聖職者の倫理観低下など、本来のあるべき教会の姿から離れていった傾向は否めない。

この世の制度として繁栄した教会は、キリストの福音の精神を十分に生きてきたか、問われることになる。

例　＊免償符；罪を許されてもそれとは別に罪を償わなければならない。

（盗んだものは返す。返せない分は孤児寡婦などに施しをするなどの償い）　　その償いの一つが「聖堂建設に寄付」ということになり、その受け取りが発行された。それが免償状と言われるものである。また、罪の赦しのために課される巡礼、断食、慈善の行為などの償いを軽くするため、免償符を教会から買うということも起こる。お金と引き換えに罪を赦してもらうと、はき違える者も出て多くの躓きとなった。

Å福音覚醒運動；

　　\*教皇グレゴリウス改革；教会独自の立場を失っている弊害を除去、教会法の整備。

　　\*アシジのフランシスコのグループ；　貧しい生き方を通して福音を伝える修道会創立。

　　　　　イノチェンチオ3世認可　定住せず貧しさに生きるという修道制度

\*ドミニコ；清貧と説教を軸とした新しい修道形態の会の創立。

B宗教改革

13世紀ごろ、頂点に達した教会の権力も次第に衰える。国家をはじめとしルネッサンス以降は学問や芸術なども教会の支配権を脱していく。

16世紀、教皇座の弱体化、聖職者の堕落、俗権の教会支配など、教会の世俗化に反発して生まれたのがプロテスタントの教会である。

a.マルチン・ルッター（1483-1546）

＊篤い信仰の持ち主であったマルチン・ルッターは、当時の教会に強い疑問を抱き、1517年に、教会の刷新を求めて「95箇条の提題」を出した。これによって、ルターの立場に賛同する人の輪が瞬く間に広がったため、教会当局は上からの権威によって動きを押さえつけようとした。

\*ルターは1520年、三つの文書「信仰のみ」、「聖書のみ」、「全信徒祭司性」を出して、後のプロテスタント教会の基本理念となる立場を明確にした。

\*異端として1521年に破門された。

「聖書」にのみ権威を認め、聖書解釈が絶対化されると教導職の権威を否定する

こととなった。その結果プロテスタント教会は分裂し何千もの教派を作り出した。

b.カルビン(1509-1564)の改革運動；ルター派と並んで規模の大きい改革派教会である。フランス人であるが宗教改革への取り締まりが厳しくなったため、スイスを拠点に活動した。1536年「教会要綱」を出し、カルビンの改革の思想を明確に提示する。

その根幹をなすものは神中心で、救いはキリストのうちにのみあるが、神が予定している者だけが救われるとしている。

　　　c. 聖公会；イギリス国王ヘンリー八世の離婚問題に端を発した宗教改革である。

 1534年「首長令」を出して、自らを英国教会の地上における唯一最高の首長とし

て、ローマから独立し、英国国教会を誕生させた。

この宗教改革に対して立ち上がったのが,イグナチオ・ロヨラやフランシスコザビエ

などで、ヨーロッパ社会は全体にキリスト教と一体化した社会であった。

　\*イエズス会：ロヨラのイグナチオ　宣教活動。

　\*カルメル会：アビラの聖テレジア　祈りによって教会を助ける。

**Ⅴ 教会が政治や社会から分離独立する時代**（１８～２０世紀）

1. バチカン市国

中世末から次第に政治力を失ってきた教会は,19世紀半ばにイタリア半分以上を占め

ていた領土を失い、バチカン市国となる。

＊教会は、地上の国々と同じ意味での国ではなく、神の国のしるしとしての国である。精神的なリーダーとしての教会本来の姿を歩み始める。

教会が、政治的な力や権力による支配ではなく、人々の信仰と良心に訴える預言者的な働きをする集いであることが明らかになっていった。

1891年　レオ13世の労働回勅「レールム・ノヴァールム」

世界における教会の責任を訴え、世界との関わりを歩み始める。歴代の教皇が社会問題に関する発言を始める。

 ２.第二バチカン公会議への時代　　（第一バチカン公会議1870 ピオⅨ招集）

　① １９６２年、ヨハネ２３世が第二バチカン公会議を召集し、激動の世界にあって教会は何をすべきか、キリストと聖書に立ち返り、原点に立って問い直した。

　　　世界戦争の危険、核による世界破壊の恐怖、テロの脅威、世界の貧富の格差、

自然科学の驚異的進歩と物質主義、人権の抑圧などの問題を抱えた世界

　　　② 第二バチカン公会議以降の教会；

　　　　「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類の

一致のしるしであり、道具であるから、自らの本姓と普遍的使命とを、これまでの公会議の教えを守りつつ、その信者と全世界とに、より明らかに示そうとするのである」。（『教会憲章』の冒頭）

「教会は秘跡である」とあるが、教会は何のしるしか？

　　　　教会は、神の救いの業を目に見える形で指し示す「しるし」である。

神の救いの業がなされるための道具となり、神の恵みを運ぶ器にならなければならない。

全世界の傷ついている人々、貧しい人々、社会の隅に追いやられている人々に福音、すなわち神が共にいてご自分の命に招いておられることを告げることによって、神の救いの計画に与ることである。

* 「教会はキリストの体である」（Ⅰコリ12：27）

　　　　洗礼を受けて教会の一員となった者は、キリストの命を受けてキリストと一致し、

キリストを頭として結ばれているという、教会の本質を表すイメージである。

教会は世界の平和や民族や人種を超えた一致を実現するために働く使命を有する。

キリストの体の構成員である信徒は「神の民としてのキリストの体」Ｅｐ4:12-16。

人類の一致を示す印となるよう呼ばれている。信徒同士の深い交わりは信仰生活の本質。

* 「教会は自分のふところに罪びとを抱いているので、聖であると同時に常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続けるのである。」

(教会憲章8)

教会とは、人生の途上にある神の民であり、不完全な人間の集まりである。

＊ヨハネ・パウロ二世は世界に向かって、教会の犯した罪を謝罪した。

キリスト教会の分裂、十字軍、異端審問、魔女狩り、反ユダヤ主義、民族差別

　　　　　　　　排他的行為など。（2000年3・12ＮＨＫニュース、3・１３毎日新聞）